

# 週刊新潮

8月6日号  
440円



30

あのダイヤモンド・プリンセス号で新型コロナウイルスに感染した70代男女には、西洋薬に加えて漢方薬が処方されていたという。胸部CTで肺炎が確認されたこの二人に対し、福島県立医科大学会津医療センターが抗ウイルス薬、抗菌薬、そして漢方薬による治療を行った事例を報告している。また、熊本赤十字病院も、コロナに感染した50代女性二人に漢方薬を処方したと発表。特に一方の女性は持病による重症化の恐れがあ



り、通常の倍量の漢方薬を投与したという。すると服薬の2日後には症状改善が認められたと報告している。新型コロナウイルスに対する抗ウイルス薬の候補だったアビガンの有効性が確認できず、レムデシビルの効果にも疑問符がついている中で、漢方薬が効くというのだ。即効性のあるイメージがないが、本当に感染症に効くのだろうか？

実は、中国では新たな漢方薬が開発されたという。中国の国家中医药管理局は今年2月、中国の10省57病院で確認された新型コロナウイルス患者701例に対する漢方薬「清肺排毒湯」の治療成績を発表した。それによると、130例が治癒・退院し、51例は症状が消失、268例は改善、212例は悪化しなかったという。あまりの効きめで、にわかには信じがたい。しかし、服薬した患者の半数以上を改善に導くと言うなら、中国の感染収束に寄与

した可能性もあるだろう。「中央政府の要請を受け、中医（中国伝統医学）のブレイン達が武漢に集結し、清肺排毒湯、宣肺敗毒湯、化湿敗毒湯の三つの漢方薬が開発されました」と、解説してくれるのは第一薬科大学の柴山周乃教授だ。柴山教授は、中医の第一人者といわれる天津中医药大学の張伯礼学長に12年間師事し、中医医師資格と博士学位を取得。2年前に帰国し、現在は同大学で伝統医学、薬学英语を学生に指導している。

「張学長は今年1月27日から82日間、一度も帰宅することなく、武漢の第一線で新型コロナウイルス患者の治療を続けました。もちろん三方剤の開発にも携わっています。中国では感染症に対して、ほとんどの国民が漢方薬を服用することに積極的ですが、ただ今回は、武漢の中医臨時病院でも当初、漢方使用率は30%程度だったようです。しかしあまりに効果が

高いので、2月末には80%以上の患者さんが漢方を服薬していると聞いています。そのおかげか、武漢での治療を参考にした天津では、東京都を上回る約1560万人の人口にもかかわらず感染者は203人、死者も3人（7月23日現在）にとどまっています」

開発された三つの漢方薬の中では、清肺排毒湯が最もよく使われた。中国で3月3日に発表された新型コロナウイルス肺炎診療ガイドラインにも、軽症から重症まで幅広く使える薬として清肺排毒湯が挙げられている。

コロナに対する漢方薬治療の経過について初めての調査にも、清肺排毒湯の効

再びコロナの感染が拡大しているが、決定打となる特効薬はなかなか現れない。そんな中で、漢方薬を使って治療に当たる医師たちがいる。聞けば、中国では3種類の漢方薬が開発され、その一つが非常に効くのだという。果たして漢方薬は福音となりうるのか。

# 驚きの報告! 漢方薬が「コロナ」に劇的効果!? 特集



渡辺賢治 医師



柴山周乃 教授

ジャーナリスト 笹井恵里子



▶中国で新薬開発  
▶日本でも処方を受けられる

封鎖された武漢と現地の病院。右は中国のコロナ処方の手引書

一般的に漢方薬と言えば、長期的に、体にじっくり働きかけて、体質を改善するというイメージだ。しかし、それはあくまで日本国内、

## ウイルス抑制の生薬

日本では、感染症に対する漢方薬の処方はおよそ1800年前の書物『傷寒論』を重視する。日本漢方協会会長の今井淳氏が解説する。

「傷寒論」には、当時疫病（感染症）が大流行した模様が記されています。序文には筆者である張仲景の親族200人のうち、3分の2が10年経たないうちに死んでしまった、その7割が傷寒という伝染病が死因でした。張仲景は古来の書物を集め、感染症の臨床症状とそれに応じた漢方薬を記載し、『傷寒論』にまとめたのです」

1918年からのスペイン風邪流行の際にも、日本で漢方薬が使われている。

漢方家であった森道伯が型を三つに分け、胃腸型には香蘇散加茯苓白朮半夏を、肺炎型には小青龍湯加杏仁石膏を、脳炎を引き起こした場合には升麻葛根湯加白朮川芎細辛を加減して処方し、多くの患者を救ったという記録が残っている。そして近年、ウイルスを抑制する生薬がわかってきた。横浜薬科大学特別招聘教授で修琴堂大塚医院院長の渡辺賢治医師がこう説明する。

「例えば『葛根湯』は7種類の生薬——葛根、麻黄、桂枝、甘草、生姜、大棗、芍薬からなりますが、2003年のSARS流行時にはフランクフルト大学から『甘草がSARSウイルス

1978年生まれ。「サンデー毎日」の記者を経て、フリーに。医療や衣食住の生活分野を中心に執筆活動をする。著書に『週刊文春 温かい家は寿命を延ばす』『救急車が来なくなる日』など。

を抑制する」という報告がなされました。その後、数多くの生薬にSARSウイルスを抑制する効果が確認されています。また通常のインフルエンザに対しては、葛根湯がウイルス増殖を抑制すると報告されています。09年の新型インフルエンザ流行時には、やはり傷寒論に記されている「麻黄湯」がよく効きました」

今回の新型コロナで中国が開発した清肺排毒湯も、「傷寒論」に記される処方複数配合したものだが、日本で中国のように多くの人が服薬できるようにするためにはいくつかハードルがあるという。

清肺排毒湯には21もの生薬が含まれており、複数の専門家が「あり得ないほど種類が多い」と指摘する。さらに服用する「量」も

今井淳氏



並木隆雄医師



明するため、今後ランダム化比較試験を行う予定という。具体的には軽症から中等症までの新型コロナ患者を2群——①西洋薬単独、②西洋薬+漢方薬——の治療に分けて比較検討する。

今井氏は国内で使える生薬に代替した清肺排毒湯を処方している。

「必要な人に5割程度を処方していますが、それでも十分に効果が出ています。翌日には熱が下がり、患者さんからはお礼を言われます。」

「傷寒論」に沿って処方考えれば、清肺排毒湯でなくとも、新型コロナに立ち向かえる漢方薬は多数あります。なぜ日本の医療機関は率先して漢方薬を使わないのかと思いますね」

渡辺医師も、疑い例を含めてこれまで9人に新型コロナの治療をした。そのう

日本の漢方医ならギョッとするほど多かった。例えば国内の葛根湯(処方薬)では生薬量18gから原末エキ스가3・75g抽出される。これに乳糖など3・75gを加えて7・5gのエキス製剤(複数の生薬を決まった割合で用いて大量生産された製品)が処方される。それに対して、中国が治療に使っている清肺排毒湯の1日の生薬量はなんと約2000g。約11倍の量なのである。

だが渡辺医師によると、「日本でも代替使用できる生薬がありますし、工夫すれば清肺排毒湯を処方できます。量も中国で処方されている3分の1程度で十分に効きます。1週間以内の服用であれば副作用頻度もかなり低いでしょう」とのこと。そしてこうも言う。

「清肺排毒湯が効く人がいることは事実です。ですが本来の漢方薬は個々を見て、証に基づき処方をするべきです。」

「陽性患者さんのうち9日間、39度の熱が続いた人がいました。清肺排毒湯を処方すると、その日の夜は39度5分まで熱が上がりましたが、翌日が38度で、翌々日は平熱に戻りました」

また別の高齢男性は、普段から生活習慣病のケアとして渡辺医師のもとに通院し、免疫力を高める漢方薬

「証とは、「虚実」「寒熱」「気血水」などの物差しを使い、その人の体調と体質を表すもの。」

中国でも、患者が急増した時には清肺排毒湯を一律に処方していたが、診察に余裕がある時は「個人の証の変化」に応じて漢方薬をチョイスしていたという。「同じ病名であっても、証が違えば治療法や薬が異なります。さらに感染症の場合も同じ患者でも、証が刻々と変化するとき、単純にいうと熱がある時、ピーク、病後などで薬を変えていきます」

「証」を診断する主な物差しを紹介する。「虚実」は、その人の体力や病気の抵抗力を表す。体力がなく弱々しい「虚証」の人は病気の出方もそれほどでなく、体力がある「実証」の人は症状の出方が激しいとされる。「寒熱」はその人が暑い、寒いのどちらを感じているかを見極める。ちなみに

「その男性と一緒にいた人も新型コロナに感染していたそうです。高齢者ではなく若い人で、持病もなかったようですが、肺炎で大病院に1カ月間入院して酸素吸入をしたと聞きました。その時、日頃の免疫力がものをいうことを切実に感じました」(同)

「虚実」も「寒熱」も、「中間」が望ましい。

「気血水」は、体をめぐらせる要素である。「気」はエネルギーのようなもので、「血」は血液循環、「水」は汗や尿、リンパ液など。この三つが体内をスムーズに循環しているのが健康な状態で、過不足や滞りがあると体に不調が表れると漢方では考え

### 国内で処方してみたら

「同じ新型コロナ患者でもこんなに違うんですよ」と、柴山教授は中国から送られてきた患者の舌の拡大写真を私に見せてくれた。確かにさまざま舌の状態であった。健康な舌は「淡いピンクで薄く白い舌苔」だそうだが、体内に熱がこもっている患者の舌の苔は黄色、また消化不良や水分代謝が悪い患者の舌は脂をぬったようなべったりした舌苔が広がるなど、患者により千差万別だ。

「漢方薬は、このように『証』に応じて処方するため、誰が服薬しても同じ効果」という科学的再現性が弱いのは否めません。西洋医学からみれば、エビデンスがない薬といわれる所でしょう。しかし中国の清肺排毒湯の治療結果、また国内の例から考えても、試してみる価値はあるのではないのでしょうか」

初期に「葛根湯」などのような体を温める漢方薬を服用すると、体温上昇をサポートし、ウイルスを早く抑え込むことにつながるわけだ。

この免疫力アップによって全身でなく局所の炎症で済ませることが対コロナウイルスの闘いで重要な役割を果たしている。「肺炎や脳炎を引き起こす全身炎症」につながる事態を回避するのです。感染した後の経過は、ウイルスの増殖スピードと自分の免疫力によって変わります。火事にたとえると、火が家中に燃え広がってから水をかけるのではなく、ボヤのうち抑え込むのが漢方の治療法。そのためには抑え込めるだけの免疫が必要なのです」(同)

「普通から自分の免疫をベストな状態に持っていくことが重要です。それには疲れたり忙しかったりして免疫力が下がりそうな時に、常に健康な状態のほうへ軌道修正していかなくてはなりません。漢方には上薬・中薬・下薬という分類があり、病気がない人が健康維持のために飲む上薬で免疫力を高めるのも一案です」

「正気は現代医学の免疫力を御反応(免疫力)。風邪の

「つまり漢方薬は治療だけでなく、日頃の感染予防や感染後の重症化を防ぐ上で重要というわけである。」

### 局所炎症で済ませる

実際の臨床現場で、漢方はコロナ患者の治療に確かに効果を発揮していたのだ。しかし漢方薬の場合、その成分が直接ウイルスをたたいて打ち克つ仕組みではないのだから。薬が効くメカニズムはいかなるものだろうか。

漢方は本人の免疫力を高

次週は夏季特大号です

8月6日(木)発売

特別定価 四百六十円